曽祢好忠集

号曽冊集

特別

宮内省圖書寮

門へ利1
號 1144
卷 ≠

曽祢好忠集

あかつきの月かとみるまでにてしらぬ秋のなかめ
うつす四つの表の月すらこゝをハかすみ山ちに
きえわたりて心をハすくしに月日小たゝ川風
かゝらう青柳のいとゝ海のひさゝまてに色ふかく
秋をまけて我もあらぬとて秋ふきて花忘
るをみをハなもしたゝ世をみるめこゝ人をかゝ
かりをたゝりをハをうかき事をのこしをて
花ちる表のあつた木葉ふりる秋のゆゝ月入
あきらけき夏の夜風のさゝ〻きの時まて

小ちゝ世ゝ事をたこなもてあやゝたゝて
しおゝなゝ世ゝ出ゝ人をみるに
きゝ海よおいの浪かとかゝ人なまの色わさを人をみる

春のさゝ波

後拾遺
乃ゝ川はしのゝ水のゝ春の水の小表やさに
あなしの表山けゝ表のゝ表しゝ水そゝるゝ
なゝ海ゝ乃表ゝ表ゝ表の物風表ゝ表ゝ
表ゝ月やゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ
言ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ表ゝ

吾みてし春は花の色をよけき山川乃みなかまきまき利
四方乃春の行くへは西乃方もなれてこそ春やいつち野乃こ
新拾
山乃ひかけ乃みなかまきまきしあしたらはつふかたもへき野へを
かこ山の影乃ゆしこけこそ吉野の春ハ宮居よりは
時乃井乃入江のゆうすきく夜のこゑ川しあらそ
四月中
かつまくこの池乃水のこけしらとやさそうらと秋に行
西乃あさしとハ春へとなるぬしいつこそいとくすハ
春日野にもしきこの宮居らとしとなまてに出き我
ひとりの市の社乃こそ川こまきにうとそうらとそ

あくつくしの神のたてくらさせらこ緑へはさらのもいらは
結こ宮乃山へさかすみさらいつまのこれらのあるを
ゆ地乃すこ川きしみれ春に野乃春と宮乃
続後拾
根芹摘春乃沼田はありたらて衣のそ秋乃春と見て
彩古歌
秋へはれるかすれるたてこふまま緑はまつをみしる
かくそ宮さはきすの宮のそ川乃春に入しそ
四月花乃中
彩物
秋日さしなる宮けはあまくらに我うま梅のゆくそ
あさうまにさうさす浪乃川もと心こけてそ春乃
続後撰雜
浪乃とり山さかすみはうつりまてあるる紅葉といな

にはのうめ　ひとりさいたる梅の花をそれ　我いたうとまりてうゑ
ましとて源へよりつゝ行の末をたどりて　我宿に植ましかば
むめ川のいと海乃浪のくらへうゑ　春の花ハつゝ
たゝ我　見し色ふかあやめ　春こそ　れしくやるをたゞみゆる　松の緑を
花ゝ　いとうしろ　春の日は　萩のうれとやねぬ　春の花
我　みくし　春を　へるをふる　行のそ　ゆるをさきに　海へ
山里は　梅のこゝ　はるをいとう　春をてゝ　花をみうてら

中乃春二月のうた

ひさしこう　春を　ちうき　風さむ　海ゆ　波
我宿は　板井の水や　ゆるむ　こゝ　ゆるを　すゝ　形る

ちうきはるをすきさかせうちうとたゝえうさゝ　はるをさきはる
梅乃花　こゝ　ひあゝ　はやはちうハなけさてのこゝ　ちうすへきハ
乃月を　みうへ　をうくすあれを　あをれなくゝ　ふるを
ゆゝすき　花は　ゆをけ　花ハ　春をやゝ　はいとゝ　ふるよ
形勢
こゝ乃ちうゝ　春の　山を　をきて　ハ　春花　春たゝ　見れうき
山陰の　ふさ　かをれう　はゆる　春を　見は　へ　川みる
春　木ゝ　ゆを　かくゝ　をみ　ゆ　世ハ　ゆゝ　ちうゝ　とあさみ
あ川さゆゝ　春は　春を　へた　つを　いはさ　の　ゝ月　うさ　やけさ

二月中

春日野の　ゆうさ　山は　たゝ　はさし　はは　春は　ゆをさ　はゆ

松浦川にみちのしほをいとし春をかすみたちて
わか宿のかしこに桜さかれとし花をうけてみきはたのとし
をさしひつるかなものあさを春まはうらくおとになきやを
のかり舟こちかて風をすくひそて世をうしもなけきそ
端たつ川春のうらくみるみはてまくみなけれはあつる侍る
あすか川のかつきをせみ春は野にわたにつけてをとつ
冬の人もこゆるさぬきの松山も春をみとられなつかまほしき
あるをこのころはのかゝ遊とかいまひこえよは
春山はきよる木にありはまさへりきつきれや花のゆかりそ
二月廿七日

多ゆらにもあらしこそ春をへく風よるくよる青柳のいと
露のふる鳴かへるれる世中をうしとこそつし秋をいとをそ
ちるくとら庭くちりさはくちあさはひらにこしや
花のときいきここらんみよしのゝやけ野はのえてこゝろを
山桜ちやしはうらん吹風よ春のさる雲たつ川にもこゝん
はなさ人を宿りの人ままて世をさて我をさ花みるいそきそれ
春雨のふるのゝ山の花みると見えき此山をさしてのとこう
花よらいりるはきてもなきそふるにくらきは
なまこえ我露の露のつりるをやうしあらく人をせんよ
冬のひのてうまも此弱さはふかちてん遠への空を侍くをしぬと

くもの花三月上

[illegible]やしの月はなやかなれども我宿の梶
もみぢこいまだ[illegible]山はいまだ木のこずえとこのあたりを[illegible]
つひのつやなのひろのふもとにおもてをしてかつる人
[illegible]をみるのこころをふまえ形ももみぢ時そ心はきわる
[illegible]く庭前のこと[illegible]に嫌うかまれそうすきまなく
[illegible]やき殿のやけ市は萩もこの家ふうもとあるうちの人
花よりこそひの風はいをはすそあやうく嫌やいてそ
かさねは花みはきてうくふしもあを思方の山へをこそ
色こんとうへしもたをく山路のをつさ波おもさけう花れ

梅花みつ小心乃ゆきねをハ色きいそ[illegible]

三月中

園のうへはをとめ花梦そすこ形ちかるこまの嫌
花さろうはるく花をそすこつ月成なる嫌をそする
[illegible]なるのみをに色なれはゆきうの人乃色を花
こう業ふりこつうをにし花をうをとをそかを彩
ゆきうをみひをさをくはまるをこ形は色ゆ
花こんとあう業をていをとをひくをうは風をそ宮
山姫のうめてをさうす衣をこみをまをにうの出てしふ
山かを月風はをうをもれ花しつはは色ハすをとをりをうの

四たり小雨さへ花をかすめてうつる流はさそうひはら
たくひるのせきかうとうとしてしら波ばかりの花ぞ
三月たちぬ
みちのくにはふかくあるこゝろ井ひとりかうべ
ゑまれたるのうつれりくまもこゝろまうけのあれはいを帰
すきわたる月日もこゝろ流さうこ宿の門まかるもて世しる
あけはてゝあきのよみ〳〵去れ変を過て花咲はなう
こゝのうつれひま細のつるれくれもうまさ去れひと思
やとゝ河のゝ色新はませうれう巣くるの日うふいくつも
法ふかく清井の原もおいはうこゝろ整へとみまて

清井まもまこゝろかれはかふうもこのまこゝろうれわ
去ゝくかふそうとゝすみうれ変れ殿れうけそしる
むゝつゝ去れ言ふれかはうこゝれ世まし世れこゝ之

変

梅は河去の言にしゝ毎と座の華もひゝ野て
こゝうれ下花去ゝを八霧もるこみをき門ゝ風
色のくけくゝうき門れあゝれこゝを去ゝ多く
ふまけあをゝをゝけくまにかまれふさける卯葵
やも白かはゝふ門する名ゝうけるれをゝのちゝきの
むくひするゝてゝる変ふとふあひこれとこきふし

あさねしてふしあまたは恭のまふをか川ることそあまうき
朝ひとり乃つれなきをなけきしてくる川まて
まくらむ事のなかしけれ世をすてゝこみあかれて
ふもめゝみいなりけりきのふは夏の世をつくりてかゝかし
かなすゝきたてかゝことゝもなき人乃かゝまて世のなかし　あかり

四月はしめ

後拾
さゝきとる卯月になれは神山のなかの稲葉をつたもれし
みるまゝに庭の草もしけきとゝもにかくふとも世なかはきけり
三くちありめさかれいまそ夏これはふるさとひちて旅の
夏乃日は人なくかまへやあけ思ふけのきそふする

郭公かのふはつねをきてしらなけきまたはかなきさ海して
聞人みまほしきやくいかなに今日萬代もたいやしらねらん
夏川のたていくのてしまくしまにほふみゆしかなふに
世中乃かうゆくき夜もおかしいてそそこてくらし暮そ
こゝさ山さしてもみし夏はいかことなくあはれこもう

新古
打ふくと眠し人の絶ふしと草葉ふつけて思ふける

四月中

たなる夕風をくさまて風かけたるひきて旅をまつわ
こあまひくかものせしろ月へくとはたまのうきをいのち
やまるてもかゝるをみまはたひふそわからゝやれはそて

後拾雑一

うつさんとてこれやなのおきてせうとみえしきもののさけの信
川上やあふちの池乃うきぬなハうき事あるやたえ人も
菱衣うつ河乃これせにとハゆきつてあらひりそ なきさ
青とけえもしの人乃恋しきに花梅に袖をしきつる
夜の夜乃のとりなきをあひさ山の松風ふくと吹さく

風雅夜

若乃葉にかくれてまちハ難破女のこやさ夜まそすし つれ のり
子川あさの元てまち葉まけさのと田にと夜さなにに 米

四月たちり

夜あろいもうすくや人乃そうゑん月をハあやまそてすくれ月日を
かさ祢ゑそ卯花うつへあさとふし月宿はりる人とみるへく

未りにくる人に法けてそたたれれのとけさい夜み半を添ふされ とし
蛍なく井りのはひともかりかすとつてもあへよみつれてそかう
日くる也ハ笑てきこえ花こえくの梅花ろしき夜も夕暮
世中ハ浅茅かりく喜たなりこと忘られさる川と何うこの里之
なつしくをかにそたて祢く山ろの袈裟ねろもさう花咲はなう
まくもやくこもの浦へ分なりもこていくそのよ夜をこうまき之ぬ
世中まそ嘆きうさ人もみしぬきてたへく夜芳に忘れうあひ みなう
夜の日のすみのよ祢にうとありつきてそそ衣ぬきうけくらし絶 やう

夏中五月ちし絶ん

三春やりをきりみハ父月よりかくわいそけやさうえ人たいもうそすき

たりたらぬ思ひ沒のまこもかつかまりしらぬ人のき糸
さきうそう五月乃沒のあやめ草ちそめ志人のひくとそうる
糸しなへたのまもうすしうちとる人ふあやめ草乃花
はやめさ志つれさ志海わまもてくしふ所ふあまうそふ（う）ら形
うとう（へ）しこ海のたら乃みちれうの志けるとゆく夜ふ
あさ乃れ乃ゆ志ゆ志のそ志ま乃こさ乃ま乃こ志を雑ふ志ま
詞
そ海河の綾乃こ乃ら乃花夜そすし乃ひとう乃利
こけくすわうれもなまさみそまを称さわうらまて乃綾る
入日さしなうくひとれ形まけて綾の乃身れ彩乃

五月中

山乃ふとふ刈りとも志れ乃ふけて地をそふ乃かの那
乃まきしいけさを乃稜とそふみを八すよ乃をて新そしき
たりそや世弁のこちらま乃そおりやこまーすみそふ
をく海そうかをつく川いとそしをしや夜れ乃ふまつさそ
のとうそすしかり乃と夜れ月も思乃あつふとる寄海そ
かりそし志八ふうそ夜なの志けそ中をそてもくれ
せこれそうする衣ふ所しそ妹そわる夜のまこ志なるふ
きこうとそやるそ八あうしたの袋乃月しかるふき
かけきそ乃夜れ夜すそそる月とあれそ乃ふ毎そそる
乃せこうきませうつるみれ乃袋のこそさしかる海ふひう

六月さて

なやましくあつさすぎてあれはてすいそのかをゑらぬ日々なれ
さて庭のたちばなやまうゑ八月ばかりしろくさきゆく夏とあれど
ふたつ川こなるまでとへやみそらとうるまハこの夏夕雲
あるひさて岩戸の山もみねへくもまとゆてしてれる波多
花夏しまれのうしとれてうしとて夏日やりふりてて多
庭ふれつあさてうるをとやしうなるの人うこれと庭ふ
こうるまとゆしたてす夏の日そうせ雲そのまうけう
ひまなくれうるいやとなれとするひされは夏そすき
うへそうしれのそれこうるをみうふつそう夏ハすき

ふるゆく扇の風もわうれハ用の清水ふみるれてそゆく

六月さつめ

ふるもとなまりの月ふねそあるふるれふるのれうふ
かくはうと常緑ふも夏ふうれあるそをけう清夏七月
河とふ夕立すすこうの世く葉風のれをたちさくせ
かこそれくうまれまう夏これあそれ宿をれうて
里と我こそうる山のみりうすたそるそうつふ成をそうつ
彩古歌一
かやり火れさ我をけうこの下こうもうるやりう多人しもこの
ゆりまこのりされをうとあるうの人のうるうさうをゆさまう
こそれまうるうみゆうる夏ものひうのあうやうるうん

なる四すゑのうへに夏をすくしぬ吹う風ふかぬをまつ世てい
ちらるゝこたちてたりつる水のあやと夏のかゝれすゝこ

六月中

四せこう夏の久しれみしこうハすゝ沈りとひと丹称まし
うとまつ〇と波いあせこまゝ夏をまゝをふねとやゝ忘て
色ゆゝとゝ物いたぬ夏の月あつさわるさ秋のひてそう
四まいこうひまうゝて園なれゝ夏乃ひゝさ称そうゝ
多まゝ秋いわゝ人のゝろうゝを夏も清ゝ君ゝとうみゝ
いう月さいつゝう夏れ月ゝとれゝひもうちゝけて妹とゝ
萩の葉ゝ乃のうゝあゝ夏ゝ秋うゝねゝ紅みうけう

後拾

きてみゝゝ妹う家う花けゝ乃物ゝるゝこう川の紅
夏川のゝて小船つるまゝゝを我うゝさけハうゝて思
ゝゝ沈ゝかゝものゝ風吹ゝしゝすゝみふゆゝ妹をゝ紅

六月なゝゝ

四まゝこうゝけゝようゝつる称ゝうゝ夏のひゝさハうゝとゝ
下紅葉秋ゝこれゝふ色浅くゝて夏の月ふまてゝうる
夏乃月の水乃おゝゝ夏ゝ秋ゝたゝふ霧の月をいなゝ
妹ゝ月ゝ園のかゝくゝひゝ称ゝて四ゝ紅夏れけゝすゝ
ひゝゝゝゝ三ゝゝ紅夏の山路ゝ咲ゝゝて四ゝのゝて

河

岩の称ゝまゝ新これゝ草ゝふ秋をゝてゝ沈ゝ

合さしひろこの秋をかぞへこそ紀友則

友だちかもの川せにすてんなかとろとくとして

ゆくをあやめくさ記さまりしてこの秋をる紀世

もちろのうきてさ海ふ大空をなつかしれよ友を所

秋

ちみをし夏の苦あふ一夕ちり野人の苦ふを

ふるなりて四方よ吹ふるふしのやてふをくうう

まそに夏月を八思ふのうにすてやりかひなき所

を其心のうちよりけてくるを夏月の来まてよ年

よきてやふみ事をを恋八余をきてねとゆく

のあれ絶なとの影をなるもとての秋のかくみとしみよ

うれをくしきしへハなみよくりとしロ名をつまし行のうそ

ちちの秋七月上

羽

やまとろれ雁のあとを古せかのふとを秋風を吹

かちちすろ秋をきふりあるうちちろ音つ〳〵袖ふ涙よ

遠山ころよまり女に花をきそりとをよ妹をたをまを

そらかりふをとめれ衣ひと日ちあれ川流ちちそろし

彩古

たちそうんとろしれよかもよりあちりけるれ日の光

同

秋ちりけたきのうそれ雨みをハやくをし秋のろを

秋をへくを年よきをちをしよ行をあれいをし

田子の浦まきてゝ出しをとゝやこゝ天の羽衣さらすゝんやう
ワンゝふるさとふきさけるみてゝこの露ふる山をゝろへゝやゝ
蟬の羽乃うすきよろゝしかゝる秋きこゝろゝ者ゝ
ゝゝ

七月中

ワ面りゝみゝその稲ゝ穂ゝ出ゝ
彩都
久ゝ乃岩ゝ乃間ゝ出ゝ
いゝ川ゝ小舟ゝ漕ゝ
彩本秋
ゝ
ワ宿乃ワ面のワせゝ乃ひゝ
むゝ舟のゝ
ゝ

ゝれゝゝゝゝきゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝ
ゝ
ゝ

七月たゝ

ワせゝゝゝゝ
彩古
秋風乃ゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

むかし人乃おきてゝおもしおもしむすら秋をふかくこゝろくみえて
ふる郷にすみてやさしき心ふかく秋のあはれをしるになりて袖さやかなる
あはれはありとみけるに我も見し人の秋風をうけて我袖を濡し
おもひてやまひにしも秋のあはれにしはやしみしを嘗ゆかしきに
女郎花にる人の聲をきくみる我にちかくいふ虫も夜すにふかくなる

八月上

為りの夜すがら羽音におどろきて聲への夜もおき井ぬれば
むしの秋乃声もしらず心にすゝみたる我もこの世をあはれて
くれをまちゆくへ秋の聲をやかるすみはなれにはなかりてそ
袖くるゝ雨と露やおきつゝ声かくる人ひとうちそへて雨の音と

うきせこゝろもまよひかはれしなくて夜をふかす此秋を我さき
見し人乃とこしおもをたのことに秋をは世の花とこそきけ
この川やまこそやまの花さき見え秋をむかふ世をとこそ詠
えもこやよみをまもりてくさうて夜をするていくさをさける萩の花の香

拾遺
神まひのことむかしの山をくみえもへ下葉をかけてふつさねなり
うちむせてくこゑの雁の羽風にしおもかけのみそさはいくそ

八月中

このやみはつかひのかゝる秋さにうりとおもひ我をたのむる
さむさのき夜ことに雨さうて行乃風にかゝる袖ぬれさ
夢川の夜床を山とぬれし秋の夜をへてわれへしなき

海ちかくふきてらすやけさ秋の月をてふ乃けハいふろ
ゆ月のこ海すゑふひろゝをワきてゝる秋そ乃ゝ
あけなゝたゝてれ月を海りゝさに萩のさゝをゝやゝ
続後撰無
ゝゝ海ゝくゝ風を夜とに海ゝ我ゝ人をゝゝてゝ
拾遺
ワせこゝ海ゝねゝひの秋風をこゝ人ゝとゝこゝゝゝ
ことせをひのこ海をてゝゝゝゝひゝゝ秋のはゝの
紅ゝひの風ゝゝをくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八月たゝり

みゝゝふあゝゝこの山に秋きゝれたゝ野の弱もゝつゝ
新勅
衣ゝゝ紅乃紅をきくれへふきゝゝゝゝふかゝそゝくゝ

拾遺
秋風をまゝゝゝゝゝふゝ秋ワやゝのあゝゝかゝゝ蝉のゝゝ
風ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝこゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
後拾
なけやゝゝゝ遠ゝ松乃きゝゝくゝゝゝ秋をけ海ゝ
四ふをゝく秋の夜風乃吹ゝに方に人の爰ふをゝつゝ
ワ四ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝかゝゝ蛩ゝ絶ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

九月上

いゝゝゝく秋ゝゝゝ月ゝゝ秋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秋をしるしるべとまてしるし秋をしるしるべ
とやまぢを夕ふかぬとはしらくもの峰なるん
秋風のてさしのもをうりみくりすはと花を見ぬ
新古
ひとりこしぬ風ふかぬ秋をしるしるべ
夢ぬしぬ秋をうの函つくり牧の函ハ秋を忘れ
こ山ぬをしらくの絞ひくりとみくふつをと秋ぬ
あ川ぬやまこの中ぬこ中ぬ所ふ秋のくりとぬ
たいはのるようひもこわとのこう菊の露ふ世けふ
ふ〜さ〜ぬこう秋の山人をぬあるをこせや

九月中

きてひなくかく野の原をるこれもこと花つきにわ
ひきしこうまろうみきくみうしたなを数をとろ
まひくをてたちもこまるぬ物ゆふ気くこう花をきこれ
きく人を世ふなきことのを秋ふ山ぬ風の吹たい力きなりう
なう月乃萩の枯をふふをく萩の花を志のつるこれなるこ
ふををくハやまをくをやくなりなを母ぬをられ和をふ教ふりて
細代りの宮治乃川風ををつりいてう月見をかをくをん
山里ハ河ぬのこうしみをまて秋のこ風ふようつを世ふり
くを西山秋乃月夜ふををハあ〜ふ和をふやいを恋
妹うを風のををふゆくをを吹かかををさ衣れをを

九月たち

[illegible]家をゆくかをしさを何のもみぢをもめ[illegible]

箱根山やこの山も秋ぞうつろひぬこの葉ぢりぬる

新古

八月さらぬ山人乃相原の[illegible]

新千

外山ぢりこの宋のうつるこまをみふる人しのぶ夜秋ぞ

秋ぞまき山の松もつきぬるかなに[illegible]

[illegible]せことさ夜の月衣かれてもうつる人をぢ[illegible]

四[illegible]をもれぬ[illegible]

[illegible]すく秋乃山人ふ[illegible]人のゆきぬや女に[illegible]

[illegible]

秋ぞ[illegible]

冬

神ぬ月時雨ぞうつろふ山ぢ[illegible]

乃木葉ふもれこうなくなるもこそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たちぬ

年にまたちふみ事をいつ[illegible]

たちの冬十月上

同

なに事も行ゑはみなこそあらしを秋ハあけて神な月哉

きのふまて今や待つる宿そ木の葉ちるをたれかとふらむ

待くしにまさるはなきはみな人もうらみ冬にはまたになりけり

招きもひせしをたちぬ原と枯はてるとそわ弱行ふたゆ之

同

草も枯の冬ともみえす霜のうへその下ゆく白菊の花

見るもはかなそ出つきわか宿の園の枝や風あらき夜なよな

白露のこほりは玉とくたけて秋まて見えしかけそみえける

なるき夜にさそふ汀の風をいとひしにたちたる嵐のおとそ聞ける

風さやくこほれは今すこし床の冬ゆきわひしにふることの空

新勅

露ならぬ袖たにさひしきなる神な月時雨ふるとふるか夜をそひて

十月中

吹ならふ冬の嵐の根あらしは木の葉にまきねとたの山人

ひとり見てはさひしと思ふ風の音をわひつつねのみなき

続拾遺

枕ねる風のさえにし神な月時雨ならにし流れそ来らし

こもろ山木の葉の露にしたたりあふ冬に見ゆる霞むかし

河よりやかさきの岩やけをさとし岩をもしみなりそそく

袖ひするにおはしきの心さへしるやおなし

都の道さて草葉も枯になりぬとて人またすまぬ

いる山にあけかたき冬の夜の有明の跡を見る

なれ行きねの有しなくとも冬の夜すから

十月をて

久堂が行た月人しるうり屋をあるしにまこう水のとなるや

たそんさたく、うるとに行こうみちてこうしれ知そ冬の山里

新古

草ねうへはまそまこうしむ井しる白雪と下葉ふの霜と結ぶ氷れ

寒かて初さあすしたうけ冬の夜小口行人をすいこすとし

みくまこう絶こ八解し冬の夜と口枯めうむ乃れたよハこ

やまうあはなをたうこうこれ白もたるくつるもあ人を風の音さふ

さしもとてみうをやうこうみとこうそあも嫌うこうふるたうこ

すしるやゝ木葉ふかくもふせ口さし冬こうて侍そ口うえ

芦の葉小敷す口ふ口なるをふかふふにうきとうこうてみて

後古京

かうこうきのうこうみうこうれうきをあくこうれうなうにうやうこ

中の冬十月上

新後古

さうきをもうこうにゆくうき神山のうこ宮やうこうもねこ

やゆかうれきてすのあうこうをあやうこう冬ねうやうた

風をくかす口ふを宮坂の乃家ねをこくさあひうう

ふこふかをうこうこう年なれかひのうれをうこうやも

秋をこうけ夜ふうに口ほうを冬ね夜すこう恋ふて

郡生るあとれうこうのあうこう池へ小ゆうと東小社こうふう

芦鴨乃きねる家への渕ふうこうなる乃冬ふも而

こう世ハふこうのたうれをゆきつうこういうこう山のうやつ

冬はきて雪ふるをかくしてそらみちのこりをみるかな
志けのちれ我身の衣かへをみるけしき冬は風もさいらまし

十一月中

続拾
霜さよはかのくさひらちてきりはましるも絶てそと世は

新古
冬草のかれにし人のいはなくにまちみるてみえん物ゆへ
夜をさむみ寝覚てきく旅寝はうすき里の妹かまくらに乗たき

新古
露霜の夜半におきゐて冬の夜の月みるほとに袖はこほりぬ

新勅
ちはやふる神なひの森のあらしに冬の来るをたちそふ人
秋はみな風そふみしくもれその色に枯ゆく冬の来ぬまて
かきくらし山里はあれなくふるしけく火のけもちらしたまきる

たきたちに出るもこほれ冬されはなこちのみさゝきこそ我も
妹なくに妹やぬる冬の夜をさむけからしと枯や中まし
久かたの天かけすそりしまてかのひまもみぬと寂しさ

十二月はじめ

さ夜中にせこまちたにはさむくとてさそやらむ袖まくらし
けさはみさてゆく冬の夜半すさめくふしたり千す衣うちまて

詞雅
うくしもたのまれん君ゆへ小宮ふるまてあかくそゆく
すみ海の波よ立やたくへましわたらちもさそえ絶ゆ
独ねのわか床はあまてくさむしろ風さうと衣くあれは
ふりつてまに宮さしもみぬ冬の日の晴ぬ空井小雁そなく

たちそや真木の炭うき冬くれはいとうけきの枝やつるん
そもわ山たのへ乃杜の枝とに降しく雪ハ毛くみしく川く
こうす忘久冬哉をつる猟人のいつをれやありこまハかくん
あるこ山稜う原よ雪ふりあ花つむ人の跡うまもなき

雪乃冬十二月そもめ

うをくうあさ彩ふきさむ杜の葉ふ山の雪やうつもねん
ひとうりし滝のそういく冬くれはくへもひのしおむ山へ
春ま川く園の枝ゑをあけまて雪をそそすみのよ
こ山まそそ山のあ〜ひけう年のかゝをもいくそかもう
山人乃暮ともとへふ苔のいろ雪ゆきうて誰うこのき

ゑみうりまの根をここなしてをこなう人そ佛とう
理火のそくふうま舟と欲つもれくきんそそふ
冬こりきあく山とみ乃杜せハそうそうそ雪そうて
みそまてうくもう冬のそれをのつませあ初やまう初の
こうりもうみそれ池乃いけつこ月ねこかみとそふ

十二月中

風さそまあまそうそ紅葉ゑ花をあ年ともふ冬そ
ひくそふ山をふ山のそうそけまそ後く雪をさくうさう冬
冬ふ山のもみやき衣うまねそ人を人乃こ安を抱うを
雪まハゆきまの杜の枝乃すそふ滝うの井うとそん

暗乃井すきまけしこうりとちをこうなきこと桜たにおそ
（法〜乃峯祢の名とも我人きたるのうそけとそふこんやそ
あらぬかあ〜波たちてあ〜夜も志う祢もろこそうつ〜きか
ミをつ川らしみ潮とふそれ沖そあそこうきたてき海よふ

新拾

都おもたふこ波だふ名うれたそうよ人あ〜こ山へのさと
たうあきこ乃あ月く乃校もうひくまて

十二月おもそう

拾遺

年ミ色ミもたのたりしおいはわかすれこふ名たりうて
くゆうつ〜ふすみ峯の乃ふきを吹つるやを冬の山を

拾遺

雪島の沖の名ふふうらまてむりの宿をかをやこねん
波瀬川やうせの波乃をとなまハ沖やをふ結ひとあ川る
かうきのゆきあそねつるれたをこあてを中我胡
拾遺

三山本を数かなたにうつ〜そをさを極ふを〜歳やき
かるを羽のうをけの名共諸〜く行にをうれてきをう
かをふあをハあら人よるを月の名川りうんかやいをを
いとまれこうひうま舟さへいそかをれこまの冬をも紀行

羽

むさ川るこまの松をうふ松よをうをふをやあんををん
あらむの年ハ我ちはあまうまて長ハ地りうふ花を
れ〜こうの秋をれつる来ふ山をたく友をう人と
さて風よむうひみこをきり紀宿よむりき井く

わきころ窓のひかりをつくえにすゑゆく月乃影をかすかに
つねてそのまゝ久しく月日をのどかにすぐしけるかあるを
またあまりせはしきことの大事はえつとむとて
まへてさのみかれにたのもしく行し毎夕になくさ
めまし心のうちにかけくらしはあし毎にそまたに
ゆくはるゝの聲に松をわすれ夕にまさるつれなひらくまゝ
花乃色をなかめはし遠の門にこそしまくいてはて
こゝにたまう月のひとつにまさりなへしひをめ乃月を
くらし草むらの玉乃風を待わすれきは水のあたよ
なれきにいま芳水のとけさす昨日みしたるみ

やとりは八幡の宮に露かけそ行たゝにかゝひし
むれこゝろそよ夕にも八重葎まつりまさそ衣紗みれ
あそふれをみしもきてうしろなくなるをゆけえ
なつまそて流まねはこうかの袖にまとて枝なかめ
心をひとつなくさめをもちしれかすをよそつきを
まろのとたいひつれてそさし海の浦の松山
みなれゐるすきくしよくそめにけるこそ松のきみそこ
世をこゝるは住井に八柿ちゃうをやあさかのゝ時
ふしはかまてせめさとひらされはゆくをゆくとする
きやくふなへたかり記にむかしくみちはそふむ

しを心のゆく系八てそなしやと思ふなせハ殿
なるあきしようきことをおすて幸すしまぬ
ルこそなるしなしたこうけくれこつ
こそ口ゐ人ハとをしきとそや

春十

ひるまて冬こうもとうしてゆ山ちふハ春人と春はやあ
毎とにとハ春人こ好すこ行春の口ひしりなんやそ
新勅 巻向ハあれしのをそ春たてハ花ゐ春とみゆふ
山里乃梅のそ折ふ春たてハうひてハ寫芝多
三毎ゆ花ふらとく春の夜ふ園のつ上ふ野きすた

うきもこうけさこの野日ふ乱うさ世ちさこあまうふ新古
かうそすこをそて加ふるなるこ秋まて日見ゆ乱
花こつ春乃山へふそしてん新ふ色ちすすこなこた
夜乃面ふなりなる花のちうかへ春ふてきまてゆ名こた
ゆ花うう花こそふしたなしてこ知てかてん野へのさひ
むこそきりのいこうたかて春野の夜の口春ふ新て流野

芝十

春かすこたちしふ流ふ乃ふそ山へのすくふ乃かうん
新古 花散し夜の月春ふ散りあひて天照月の新て稀か
夜夜きて流ふるれこつ雨ふ山ちくきひるくそ野ゆ春

梅乃さかりすぎゆくにたちうぐひすの山もとくきく
くさ海ふかせれうの口さしをかけてゐるもまたにぬれ
ぬ秋ふかし〜なるあれ弱と市なれてなつくさ小松原
さ月やこゝろ八うの早うとして花橘かをれはけつる
ゆうすさ松わうこれたうとうもれ新こゝろ人ゝとれ月新
こゝろ月乃かをつゝこゝろ山ほよあらつゝ初そかをゝさまけう
なつゝく吹うる風ふきうゝひもさそうゝひもさそうゝ作

秋十

梅あされかうふれうをしあれみをへ外山うゝけ秋風歌
秋風乃ゝ衣日れをうれ分うゝくかゝふなみそたちうゝ
山里の芋れまうきのへたてすをうゝ人の袖もこそもし
ゝれ秋のゝ風すゝくなるけを根の衣かえさ也
山里にゝとゝひかるゝ松れのひゝなく秋を物うかれき
なつゝきれ松れのゝうをゝうけう秋きにゝうゝ新ゝ
こゝろやまゝこゝろうすきいてふうゝとみうゝたゝうす
みゝしのきゝ山けふたゝ松ゝく秋風ふそなをきね花之
ゝうゝ風とゝ吹まゝる通ゝうにゝいゝう家ちたゝ通
松風のゝうゝひゝかる秋すゝれをへ人乃ゝ新ゝ人ゝ
冬十
かゝにゝき山の木ふをきうたゝてぬゝ風そ寒ふ紅

忘けるとし道のなかれてくるさうめあハぬ冬ふかう

句

秋ちるひさかたの雲のたなびくそこ冬こそかれけるの

白雲はあらゆく冬こそかるまハ乃ふ手れたるぬう

かるみてゝ水こけたる水ハ底ふかくなるゆゑふるえ

ぬさらる冬こなるふかにうあれこそ秋やふかるれるぬ

うけふとて人ふるせんきさらあるれ宿ふ事ま西

いとやとゆゑくけていはるふしみうきをるこをけ

うまゝゝと新しき園のみそうもゝくて春に袖ふ

続後撰雜

毎せきひ波の行乃うえ沖ゆるふそなけうれなる世

忘十

新古

ゆらぬをるう毋人からをこゆるをるぬ忘乃ふ

ひさもこうゆられむすうあなるひまを忘しるにはるを忘

忘俺くるゆゑ木ひのれこまハ所ふなきまてにかるゆ

ま波うるおきのそふゆきみをいりてを世ハとを忘ま

や三日ら月波のくうまをかさうてうくふとをるうやを

後拾

あらさなし朝ふまるあるにらあるとを忘しふをを

続古

君まるる四をちるにてくるを数をるれ乃ふなるを忘

君こふて忘ひくふふなやをそ風のあふゆをひをなを世

をくまれハあるけるまゝ乃とや西のうちふ和ハふを

乃忘ハ法けてをくをふかをそなるをふこをけをくれ

あまたハ氏毎の下れかゝ世よう人の心乃あさきゝけさへ
きゝさ山の井にうつることもせしかハにこりさそにほへるとも
たゆみ人をとらるに事ゆる事をさるしたかなる人ゝ
あまへしと歌くあつ限りあハ海ふうきて世をゝかうれ
はて川瀬ハ世にゝそ数ふゝれなかれなかれハちゆくなるふ
数なるね心をもちゐてきゝつる人を思ふね時しな道ハ
やはらしれくりて小袖をえて衣袖ハなうらる瀬とゞて
松乃葉の緑の袖ハ年ふれと色かハる事ゝ我なうなくふ
かさくすゝ心のやうに由をひつらしとみる世ふゝそ従き
ゝふらし老ね我身をなけきにわか黒髪も老うくなるゆく

さゝ波やなかゝの山乃なかゝへて心ふ物のかなれさらぬや
へしや世にいふ世すましと思ふ心こりかたへと思ふ乃山ひこ
見よしのふかそこの松すゝ世ふゝをかくし思ふつれなき世の
続拾雑
尾ふかくも思ふかたらしを白雲れかゝる浮世ふすまかせんとは
ゆいよるとも猶たのかへく花乃のうしにとくきぬく我身ゆか
やへむくら老ゝる宿ふ絶吹風をとしれ人乃くるゝとそ松ふ
まろこもけゑゝる宿の草れとふむとみるまてをけ白露
のとうにしありかゆるやここなるの久しくゆふやまとたてこ
いての山よそなるにもみるへきを空ちなんたてそ空のうら雲
みちをひの浅乃くも苦のかくまなき浮世中ハたまうらゝなき

あまたいとふかくなれて世中に行ひ身ひとつを信仰ぬやけ
さゝ〳〵河ふかきをてゝ人のみちすぎを渡ふみをまゝそ
苔ふかき伏見の里をあれはてゝ世のひさまをかなし
花すきかふいてゝ人をまつくぶ世をうしとおもふ人なな
人ふかき流のまゝふ三川にて水のあとをうかりひきやな
後千恋二 九月の四さをふあくまをてゆくをもをぬ物とそ思
れ〳〵なる気四小かふ手すかりへを人ふあ家ありやを
をるや所四ふひをいとなきをを夏ふみをを河うあやしさ
ゝ川やゝうふをあゝやかをふ人物たゝをみすをゆく
九月をあをしゝさ海おもあすゝゝふ人あはをひゝきをや

ふ川ふふいまをかまをふをみゝゝをたをゝふ行うこふ
整ひをゝ弱の春ををたゝをうゝふ行をふ流をふ流のまこふの
かひなくて月日をのこをすゝけゝををなゝて世をゝ
月
をゝ海なゝ三海ふをもをゝふゝふ少人を流ゝゝ思ふ人
後千
きけを
をゝ海ふをて四月ゝ〳〵松の木枝さふ出ふ松ふけゝ
きのこ
後百人一首
久こふゝ雪をを松ふゝゝあふこ新ゝ後撰の外山雪ゝゝ
ひのえ
新後古
あまを雪やをゝをゝあゝなをしまを四ゝ三ゝ人照日の雪ゝを

ひのこ

数てとふれりひのもとにあらしく
はちのこ

小山田のひつちにもしもとにあれと四ひとつふとりもせん
はちのこ

今のこの世ふかまつちにもとにたてやとにもとにたてそふ
かのえ

いくせしもたくしとそふの世中のそし思よかるこねはうし
かのこ

人はとはしにもとふりしなれて池にもまこと
ここはのく

ゆくすえふたよあはけうふのなれて人はまこさうやハ
こしのく

あふこ水こはのこまりを井ほくふなてくいるんとそれ
一日ゆくり

さくあ水くひ日ゆくりふゆくるてふ水の秋や川こるん
一よゆくり

乃人くゆくりたふこそありくくし聖中井清水流よ
ひんかし

ふる里ふうゆくさふ手思ひもて恋しにふ秋ふもなく

世間を

後拾遺雑上 藤原為忠

なごしの山のうつせみ

見れば

人をみるかんしゐ関しゐ世間にあるかあるかなきかはかなし

ひつしさる

袖ひつしさるもあれこいたるうつせを涙とかしもとそ絶

ふし

さか山のにしきをるこそ風ふきをるやまし

いぬ井

やまかつのさもまつ泡なくにまこもいぬ井の独ふなをは

きて

なにはせくひるさたのこにへしてそ所ハいくつにおそ

うしう

世界をうしうしかく時もあり人なんやそ世てすもてそ

ほうし称平

恋しさをなくにあらてこころにかへしてみるやせをの袖をと

ふつ者ものはかなきもの本と風吹とふ物をうそ松人

なんとかひなくて世をすくるひきれ山と嵯峨沢

ちうしうしうまさうてうハのとふすりぬそなにはもてそ

同聽院乃中ハ乃ひ絶しなくてまうたるとてさ

なきれく又の日たてまつりける
よそにみしのうちこのはらふうらさひて浮世をはなる天のちかそ
うきみちこそ名にたる砂の松かれと咲ならぬ波にやすらふ寂し
白波のたつきありせはとてうき世大宮人と物も思ふまし
三保の松原も世にかなる所なれとも心を○たちいかにとふらん
よそにみしことはなきに夜もあら磯とて憂きをすてはてそ侘ぬ
世のうきは尽ぬるにやあらねこ山への山もとそゆかしき谷川の水
谷川のなかれにしみにも流れし心ひかれてすみの松
すみのえの松をみさらん秘するに神たにかへて捨ぬ思ひ
なりもしやかをはなつぬ世なるらし鶴とたてくわかむすめは

源順ときをとこそ世し恋てうらこころすくこのはらお
しま事にんなりとよきこの海のあきれもしらてそ
わかしらむと申たてそはかくへまろかなといれて
恋しれ恋ねもみなみにもやすもたりしきをとこさそ世
たよしれしこみをそて心のうちふかうけるかとろ
をこにあらけし思ひ待くへまゐる悪とうこのみちに
うれへこゝそのなりを弟の風のまちまち軽日は
の花のゆふかくもしらとなき世とかけをこ
てしまれいまきれ恋乃たちかへりまた柳のいとを
くり出しこそは世にそなた人へ伝とくしちの言ひをつき

川へきりかけたのとれたものうちよくものうへの
そこことみすなふををみをゆく人ふねをもる事
なりこあることれそたくる雲をひろひ雲をたの川
やくたくの雲をふれをかひるき舟をうう
あをかをこなそやあとれすきたりうをいて
以人はをよをせのれるるなくふとうねことをけふ
をうかきもかこをきもをせのれちをあちきな
しねいをね花鳥ふも物ををせ四るきゝをふを忘
ありうにいひをしてをこつれなるぬ世ぬなくさか
しとをの心しもあをしものこうりをこけ心のんも

きてきくさハの行をのこきうて月のうをれう
さうをもくるし花咲雲も雲やをくおふすう秋も
うをまうすををへあうみをとれ神乃世ひよ松川う
くをう井の流ふうひちふうを雲も秋も四う
こあをハをを時をうぬおりををしのすこそやよ
やなりてもしをそをりやや

春十

川乃うすひりをてきう流のたり雲を雲への風やをうん
う称ひふうのうにかをみたりうふ雲やをよりう四うもう
あけをまちれゆきうあうの雲をハ花をて四やうをうやハ

市のみちの名ゆゑにこそ去年の春の花をもとめ
尺ばかりなる流の水のうつくしかりしかの小林をうち去りしも
孫のひさしと見しかなしき市松なく市松もとめうよ野辺の小
花山へ小鳥を捨てし市松ちりぬるころ我四かの郎
さくら河井て明る芦の葉ふかく捨てかきたれなん春はよやけり
あ川の山ちとなれふうちみをひとまちひろう去年
こしすもとかへる去をもかし世ふるしけなきこと
夏十
夜ぶをひきまてれ夏をきこしたしとふなくかるる
かるくさしういあつ山ときしらこのよはきてうへきかを
須後拾
夕やこよあ夏のいろうよみそけるこ蘭の落のちるなりり
いてしてふしもひつてひきめるもれ法しかをこ名ろか
さ月山茅ゆもれ小をを野のなく殺きけはたるなる
夕ちよや言にりみかの月のなまりのそうへをそやをえ
れかるこ小言行ることあ山みを知て心のうちを秋をそよ
秋十
秋きりのこちりをすこ心あてよをたを風をきさるまを

毎年のごとくゆきてこつたんさわ姫のひとをとせる山のさま
花すゝきに入るまゝにきたくゆわあきふまつけるつきなく
山のうつりかはりにとをなりすゑやくうるさきあり
白露の萩のうへにふるよりけあさかりのもゆゝ弱
松人乃ゝさゝり世て秋山ふのきハもレハおもふれまし
口とゝなしゝ雲ハたゝふ蛍しれ殺きく時やなるゝ
ふかい月ちつきやゝ雲すゝ空山の色うゝゆく
あまのをハあれとうむ知ゝこすふとを秋をすつ

冬十

冬きねと人をいとゝあさこうり絵をねれハあゝしとをよ

後吉志

物かくきみは心をく霜の苗のまうきふをハみをなん
をゝ雪のをふきやゝゆゝ秋の色の年をふなく殺ゝ
きすれく殺人はなこひう冬をりかゝあう人乃心を
神まつさゝきふをすふ物はうゝ久月秋を見ぬきふ
神なる月をゝくこひのやゝこひふをふ風のこゝ
菅ゆくとうゝ秋のふきてゝ我所をこゆうをうを
あれをすゝ物月ふきゆゝ君をうゝ年をすん殺人の物
芸たゝふゝこけをん沼水のをゝこひてゝ物ふゆゝ
年のうちふ花咲ふゝう物思ひをゝ風ふまゝきをう

恋十

色にいでぬ人もうらめしとてこのねさうをけふうへそ[illegible]
[illegible]
[illegible]池のうちなこうち地へてたちて[illegible]
うてに成れすなこハいとまを変のなこにひとつの辺
いつこうにあり八すもあと口きくふこてい[illegible]
とまのまいゆくこうてとまりまにてまくりまにてまに
神ふあり[illegible]山八いこうち地うすたつりとハ心てなるこいを
てうちこうちこうちこうにまをてこうまをたるみんかこん
[illegible]
[illegible]

[illegible]
あさ海やけうれ沼乃橋花すみこめてしまをしあれ
さくらけをれ堀本あるそれく花咲ふうたれたれしに
加をこめて宮八きねたふまてかすうひなし春乃新八
やと地く梯ふうへ四うしさくこをれとちりぬうは
ますりく れ桜原ふくこうありかいもを春をすをうの四うな
加ゑう史のこをふりうてあやを年ふあうり　こんの新さ
ふうをうこをりの衣ふなるなへよひもこうあへを時ふなく
さみくまて物なりみけをうやをれなく蝉こへふ四うれしや
へ河ふうふこを女ふるふ雅波女のわさをうそあをへふうの

みさゝ野のうゑこそ雪さえ侘ぬれ
ゆきのうちそうゑそうゑそうゑハ秋のこゝろ
ゆかしけれ
ゆうのつゆさゝきハこゝろとゝまらぬ
やそしまの秋のよもみそうくこゝろ
まねとゆふ〳〵秋をこゝはよりそ
のゝ山ゝをうゝゆゝ風をこゝいそたつ
井せさゝうの水ゝをこゝ
乃きゝ梅さきぬるそ
あゝむ乃年こゝゆゝハ
さきこゝゝゝゝゝ

[illegible]
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ
ゆゝ

かくれん坊とうせひろうの人をつる船なるべ
きやうに人をつるとみるふうに意ワるかの
きやく
無こゝろ
きのと
さゝやけてなびくはひきのとうて人をまつあるさま
ひのえ
ゆふぐれとそ白ワ意のえうに風やあるまじきあり
ひのと
後拾遺
ゆふぐれて冬こゝろをとしかなふのふワひのくれふる
はちのえ
こゝろ舟のこをうなるふねのひとつらにえあるねあるさま
はちのと
風やけをゆきまれ杜のひとつ松ばらのごとくなる
かのえ
須千
花のまえをこゝにとまる船なるべしはるもまし
かのと
ゆうゝつるきゝゆふ入なるべしてうて紀世すくうん
こゝのえ
去てゆくゆくるうへこゝゆとゝのえすくあさてゆく

三川のこと

ひとめうつはものかはいはんあるへきをあるようにあるへしと

一日ゆうう

ひとひひめうつくしくせしかたてきたるひすこしまいる

一よゆうう

みちのひとまうちとかへしあるへきなりあるへきそこ

ひんう

にくくしひとれすまいんうあるあるへ

たいこ

かすみさいかひのひのいはさくはなへ人をまたしたうちのへ

みかえ

稲荷の山ふもとへ人をすまさしてみたてせて

ひつしさう

よひすうよ衣てひつしうひのあへうてこと人を

ふし

いさやまうまひよこねてふとこ我をもはのこうまを

いわ井

きてはねはてはのとうにはかとあへをなをつてはふかうを

きうう

世中にかとうねはいたくてはうあはたはかうを

うしころ

あさ地よのたびしさハ中ゝとなれと秋をひとつさ紀はな まへハ

こ乃あきのうしたゝらうことゝあり

詞花
見ゐりミれはりめて君れハ君か世にふりてひさかた堀川のすゝ

物かくろ洗ゐ本そてよめる

拾遺
わことを思ひはいそしろの松松を世ハさとこけしこゑせ

もえ今する事しらぬ此ふとさ付よ人のまかるへきわかてるハ

本ニ
右尚書禅門本書写之
自一校了 本不審千万々

家集不思議

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]